

がらがら橋日記

宮森 健次

K先生

小学校1, 2年生の時に担任してもらったK先生から学校宛に手紙が届いた。50年以上を経て、K先生の名前のスタンプを見るとは夢にも思わず、まず存命だったことに驚いた。子どもたちの落語のことが新聞に出ていたので、とある。またまた子どもたちのおかげで、ご縁をいただいた。

先生の年齢など、まったく知らなかったが、今回の手紙で「大正生まれでずいぶん高齢になりました」と書いてあって、ようやくわかった。少なくとも95歳にはなれるわけで、それを思うと文面の確かさにまた驚いた。教わっていたころは、ちょうどK先生が40代ということになる。6歳のぼんやりとした頭で、先生のことを若いとも、おばあさんとも思っていなかったが、大体正確なところを突いていたようだ。

不思議なもので、手紙を読んでいると、当時のことが次々と浮かんできた。と言っても、なぜそんなことを覚えているのか、記憶の優先順位がさっぱりわからぬ断片ばかりだ。

講堂（体育館ではない、念のため）で、ドッジボールをした。K先生は、子どもたちに混じってサイドスローでびゅんびゅん速球を投げる。ぼくはといえば、早生まれの上に発達が遅れ気味だったので、まったく戦力にならず、早々に当てられて外野に出たもの

の、ボールをわざわざよこす子もいないので、ただ先生から放射状に繰り出されるボールを見ていた。スピードとパワーと先生の大きさにほれほれしながら。

K先生の地を言うような速球が横切ったと思ったら、ぼくの目の前にいたH君がそれを腹で受けた。そのまま腹を押さえてうずくまる。K先生は、

「だいじょうぶかや。」

と声をかけると、コートの外にH君を出して横たえ、そのままゲームを続けた。H君の実際細い体にあの速球はそうとう痛かろうなあと同情した。H君とは長く会っていないが、彼の息子はプロ野球選手になりバッターとして大活躍している。選手の父は一球で仕留められたが、子は仕留める方になった。

「母上様は、お元気ですか。優しいお顔が浮かびます。」

手紙の終わりにそう書かれていた。母が来年には七回忌を迎えることを先生が知られぬのも当然だ。

「お前は先生運がいい。K先生に〇〇先生…」と母は何度も何度もぼくに言っていた。

先生の記憶にまだ30代の母が刻まれていることをとてもありがたく思った。母が亡くなったことの報告に合わせて、母がK先生をとても好きだったことを伝えようと思う。



目次

手作りのくらし2	木幡 智恵美 1
ニュース日記	中村 礼治 2
がらがら橋日記	宮森 健次 4

手作りのくらし2 20 セーター(3) 木幡智恵美

前身ごろの1段抜けは、ぱっと見には気づかない程度のものだ。後ろ身ごろも1段飛ばして編めばいいか。しかし、目数を紙に書きながら編んでいったはずなのに、なぜこうなってしまったのだろうか。解いて編み直す際、同じ手順を繰り返すということで、妙な慣れが生じ、それで1段抜けてしまったのだろうか。今日はここまでやっておきたいという気持ちになる時に、気が急いで飛ばしてしまったのだろうか。いや、何度もやり直してここまでできたのだ、いい加減では済まされないという気になり、1段飛んだ箇所まで解くことにした。

胸のところまで編みかけていた後ろ身ごろを一旦置き、前身ごろの編み終わりの箇所の糸を解く。右手で解きながら、どんどん左手に巻き付けていく。模様付きのところには、3種の毛糸の色が変わるところに結び目がある。結び目が表に出ないように、1か所1か所気を遣って編んでいったというのと、何度もため息を吐きながら解いてい

く。飛ばした箇所まで糸を巻いていくと、直径10センチを超える球ができた。その糸球を見ていると、中学生の頃を思い出した。同じクラスの友だちと編み物をするようになり、ミトン型の手袋をいくつか作っては見せ合った。ゴム編みはその時に覚えたのだ。

気を取り直し、前身ごろの胸の部分から編み直す。大きな糸球がころころ動く。そういえば、編み物に凝っていた頃、糸球が転がると、飼っていた猫が飛んできて、両前足をちょこちょこ動かしては、糸球を転がし、追っかけてはまた転がしていた。失敗してできた大きな糸球が、半世紀も前の映像を蘇らせてくれた。猫の様子を見て、豪快な笑い声を出す祖母。竈の前で、朱に染まった伯母の顔まで浮かんできた。母がせわしなく、近所に出かけて行く。父が投網を担いで帰ってくる。糸を解いていくことで、記憶の糸までが時間を遡ったのか。無駄に過ごし、損したように思える時

ニュース日記 705

中村礼治

日韓対立の背景とゆくえ

30代フリーター やあ、ジイさん。日韓両政府の対立はおさまりそうにない。

年金生活者 北東アジアに残っていた東西冷戦が、米朝および南北朝鮮の接近によって終結に向かい出したことが背景にある。

米ソの冷戦が終わったとき、それまで抑えられていたナショナリズムが東側陣営で噴出したのとそれは似ている。

ソ連の崩壊時は、ユーゴスラビア紛争にみられるように東側のナショナリズムが熱い戦争となって噴出した。北東アジアではそれとは異なり、日韓の経済戦争を引き起こした。前世紀末の東欧にくらべると、現在の北東アジアは資本主義が高度に発達していて、流血と破壊のリアルな戦争よりも経済戦争のほうが有効と考えられている。

30代 現在の最大の経済戦争は米中両大国による貿易摩擦だ。

年金 東西冷戦が核兵器を頂点とした軍備の規模と性能を競うバーチャルな戦争だったのに対し、米中の争いは経済的打撃を相互に与え合う点でバーチャルとは言えない。

第2次世界大戦後、世界の戦争の本流は熱い戦争、リアルな戦争から、冷たい戦争、バーチャルな戦争に移った。現在では熱い戦争は国家間ではほとんどなくなり、おもに内戦や対テロ戦争として行われるようになった。

資本主義の高度化、グローバル化は、そうした冷たい戦争、バーチャルな戦争も次第に無効化しだしており、代わりに流血なしに打撃を与えることのできる経済戦争を戦争の本流にしつつある。

30代 韓国が日本と結んでいた軍事情報包括保護協定（GSOMIA）の破棄という、まさかの決定をするに至って、両国の対立は不信の投げつけ合いの様相を呈してきた。

年金 GSOMIAは「日韓双方に、相手国から提供を受けた軍事に関する機密情報を第三国に漏らさないよう保全を義務づけた協定だ」と説明されている（8月23日朝日新聞朝刊）。北朝鮮が2度の核実験をして朝鮮半島の緊張が高まった2016年に署名され、発効した。

米朝が首脳会談を重ね、東西冷戦の一環である朝鮮戦争の事実上の終結宣言をしたことにより、GSOMIAの重要度は締結当時に比べて低下したと見ていい。もしどうしても必要な協定と日韓両政府が考えていたら、双方とも対立より妥協を優先して行動したはずだ。マスメディアの報道を見る限り、それを示す跡はうかがえず、破棄の回避よりも相手への批判を優先したように見える。

日本政府が徴用工訴訟の韓国大法院判決

を不当とする根拠としている日韓請求権協定は東西冷戦さなかの1965年、日韓国交正常化に際して日韓基本条約とあわせて締結された。冷戦の前線基地の役割を担われ、ベトナム戦争にも軍を派遣していた韓国の国力を日本のあと押しで強化するのがこのときの国交正常化のねらいだった。

その冷戦の北東アジア版が米朝の歩み寄りによって終結する可能性が開けてきた現在、基本条約も請求権協定もその役割を低下させつつある。それが請求権協定に縛られない大法院判決を導く要因のひとつとなった。半世紀以上に冷戦が生んだ日韓基本条約の破棄を韓国側が主張し始める可能性を指摘する見方も出ている。

30代 判決を日本政府が拒否せず、解決を原告と被告企業の協議にまかせる決定をしていたら、ここまでこじれることはなかっただろう。

年金 安倍晋三はこの問題について「日韓請求権協定で完全かつ最終的に解決している」として、大法院判決を「国際法に照らしてあり得ない判断」と批判し、「日本政府としては毅然と対応する」と妥協の余地のないことを強調した。

だが、原告が請求しているのは未払い賃金や補償金ではなく、不法な植民支配・侵略戦争に直結した日本企業の反人道的な不法行為

の慰謝料であり、請求権協定にはそうした請求権は含まれていない、と主張している。

原告らのこうむった損害と苦痛の救済を第一に考えれば、判決は「国際法に照らしてあり得ない判断」とはいえない。国際法の拘束を受ける請求権協定を無視しているわけではないからだ。日本政府が過去の植民地支配を本気で詫び、償う意思があれば、判決に耳を傾けることができるはずだ。はなからその気がないので、請求権協定がすべてであり、それを絶対視するような姿勢に終始している。

30代 安倍晋三らにしてみれば、謝罪も償いもう十分したじゃないかという気持ちなんだろう。

年金 謝罪と償いはそれをやる側から見ればやり過ぎるくらいやって初めて相手に受け入れられる。する側もそれでようやく負い目を払拭することができる。だが、過去の植民地支配も侵略戦争も認めながらない勢力をコアな支持層とし、韓国との対立を内閣支持率の上昇に利用しようとする姿勢が見える安倍政権にとっては、やる必要のない謝罪と償いを今まで「やり過ぎ」てきた、というのが本音だろう。

「なぜ解決済みの問題を蒸し返すのか」といった韓国批判が日本では繰り返される。韓国側の「蒸し返し」は、日本の植民地支配が朝鮮半島の人びとに負わせたトラ